

深川市
国見 2 遺跡 (Ⅱ)

—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和 63 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は昭和61年度より調査を実施した北海道縦貫自動車道建設用地内深川市国見2遺跡のうち昭和63年度分の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査及び本書の作成は、財団法人北海道埋蔵文化財センター調査部調査第2課が担当した。
- 3 本書の執筆は、I章を鬼柳 彰、II・III章は森 秀之が行った。
- 4 実測図の縮尺は、次のとおりである。

遺構 1:40 土器拓影 1:3 剝片石器 1:2 礫石器 1:3
各図版にはスケールを示した。

- 5 表中の石材については次の略称を用いた。

And.:安山岩 Sa.:砂岩 Obs.:黒曜石 Schi.:片岩

- 6 調査にあたっては、深川市教育委員会の協力を得た。また次の機関及び人々の指導、助言をいただいた。(敬称略)

小樽市博物館、余市町教育委員会
池田輝海、佐藤孝則、東出隆治

目 次

例言

I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査に至る経緯と調査の経過	1
4 遺跡の環境と立地	2
5 層序と微地形について	2
6 調査の方法	5
7 調査結果の要旨	5
II 遺構と遺物	9
1 遺構と遺構出土の遺物	9
2 包含層出土の遺物	12
III まとめ	31

挿図目次

図 I-1 遺跡の位置	3	図 II-7 石器 (2)	19
図 I-2 発掘区及び周辺の地形	4	図 II-8 石器 (3)	20
図 I-3 重機による遺構確認調査範囲	5	図 II-9 石器 (4)	21
図 I-4 第四層上面の地形と遺構位置図	7	図 II-10 石器 (5)	22
図 II-1 H-1 と出土遺物	10	図 II-11 石器 (6)	23
図 II-2 H-1 出土遺物	10	図 II-12 石器 (7)	24
図 II-3 P-2 と出土遺物	11	図 II-13 石器 (8)	25
図 II-4 土器 (1)	13	図 II-14 石器 (9)	26
図 II-5 土器 (2)	14	図 III-1 遺物の分布	32
図 II-6 石器 (1)	18		

写真図版目次

図版 1	遺跡遠景	37
	発掘調査前の状況	
図版 2	発掘調査後の状況	38
図版 3	H-1	39
	H-1 出土の遺物	
図版 4	P-2 と出土遺物	40
図版 5	調査の状況 石器 (5) の出土状況	41
図版 6	土器 (1)	42
図版 7	土器 (2)	43
図版 8	石器 (1)	44
図版 9	石器 (2) (3)	45
図版10	石器 (4)	46
図版11	石器 (5)	47
図版12	石器 (6)	48
図版13	石器 (7)	49
図版14	石器 (8)	50
図版15	石器 (9)	51
図版16	石器 (10)	52

表 目 次

表-1	遺構出土遺物一覧表	27
表-2	包含層出土遺物一覧表	27
表-3	遺構出土掲載遺物一覧表	27
表-4	包含層出土掲載土器一覧表	28
表-5	包含層出土掲載石器一覧表	28

I 調査の概要

1. 調査要項

事業名	北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査
事業委託者	日本道路公団札幌建設局
事業受託者	財団法人 北海道埋蔵文化財センター
遺跡名	国見2遺跡（北海道教育委員会登録番号：E-10-30）
所在地	深川市音江町字音江493番地ほか
調査面積	5,000㎡
調査期間	昭和63年4月8日～平成元年3月31日（発掘 5月6日～7月2日）

2. 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター理事長	澤 宣彦
専務理事	山本慎一（昭和63年5月31日まで）
	◦ 永田春男（昭和63年6月1日より）
常務理事	竹田輝雄（同 上）
業務部長	間宮道男（昭和63年4月18日まで）
	◦ 伊藤庄吉（昭和63年4月19日より）
調査部長	中村福彦
調査第2課長	鬼柳 彰（発掘担当者）
囑託	森 秀之
	◦ 中田裕香

3. 調査に至る経緯と調査の経過

北海道縦貫自動車道のうち、滝川～旭川間の工事が現在進められている。国見2遺跡は昭和54年度、北海道教育委員会が実施した北海道縦貫自動車道埋蔵文化財包蔵地所在確認調査によって発見されたもので、昭和60年度に当センターが遺跡の内容を把握するための事前発掘調査を実施し、翌昭和61年度より発掘調査を開始した。

調査区が23,900㎡と広大であること、深川市内ではこのほかに5箇所の遺跡がこの工事計画区域にあって発掘調査を並行して進めたことなどから、本遺跡の調査は工事工程と調整の上、3ヵ年に分けて実施した。昭和61年度は調査区北半部の15,000㎡、昭和62年度には調査区南東部の尾根上3,900㎡の発掘を行った。この2ヵ年分の調査結果については、すでに報告書を刊行している。

本年度は5月上旬より調査区南西部の丘陵中ほどから掘りかけての5,000㎡の発掘を実施、7月初めに終了した。3ヵ年にわたる発掘期間は実質7ヵ月である。

4. 遺跡の環境と立地

国見2遺跡の地理的位置については、昨年度刊行の報告書に述べたので、ここでは本遺跡の立地について概括する。

本遺跡の南方にそびえるイルムケップ火山は、^{せいでこが}神居古潭の峡谷と空知川の間に広がる^{せかい}幌内山地西半部の中央に位置する円錐形火山で、漸新世末から更新世初めのころに噴出したと推定されている。山頂部は急峻でいくつかの峰に分かれているが、中腹以下は開析が進みなだらかな丘陵地帯になっている。数十の小河川がこの丘陵地帯を切って流れ、石狩川・空知川と南側の^{ないかいよ}内大部川に注いでいる。

国見2遺跡が立地する馬の背状の尾根は、イルムケップ火山の主峰の一つ^{せうりくか}沖里河山(802m)から北方へ広がる丘陵の一部である。遺跡付近の標高は160~170mで、ここからさらに北へ延び石狩川左岸に達している。この尾根の西裾には、これと平行して沖里河山に源をもつ音江川が流れ、国見峠の北西で石狩川に入っている。

音江の市街から国見峠をとる市道の起源は明治21年に開さくされた上川道路である。この道路の開通を機に音江では開墾が始まった。現在、石狩川左岸の平野部ではおもに水田がつくられ、丘陵地帯は畑や果樹園に利用されている。

本遺跡がある丘陵の頂部から西側斜面は調査前まで畑になっていたが、以前はリンゴが栽培されていたこともあるという。調査中にもリンゴの木を移植した穴がいくつも発見された。調査区はほぼ全域に渡って耕作土下にプラオの痕跡が残されている。このため遺物包含層は攪乱されているが、南側へ行くほど出土遺物が多く、3ヵ所発掘された遺構もすべて調査区南側の頂部から西斜面にかけて分布している。

5. 層序と微地形について

基本層序は以下のとおりである。

I層 黒色土(表土) 層厚5~10cm

II層 黒褐色土 層厚15~30cm。拳大の安山岩角礫が混入している。

III層 暗黄褐色粘質土(漸移層) 層厚5~10cm。大小の安山岩角礫が混入している。

IV層 黄褐色粘質土(地山) 大小の安山岩角礫が混入している。

本来の遺物包含層はII層だが、調査区のうち大部分は耕作によって、I層及びIII層・IV層と入り混じっている。基本層序が典型的にみられるのは昭和61年に調査した尾根頂上の一部と、今回調査した沢跡付近のみであった。IV層(地山)には、イルムケップ火山の噴出物とみられる大小の安山岩角礫が混入しており、小さな石が耕作によってII層中に持ち上げられている。

今回の調査区は昭和61・62年度調査区に連続しているが、中央部に沢が入りこんでいる。この沢の真は上部まで埋められており、端は崖のようになっていた。埋土の中には大量の木根が入っていたが、これは斜面上部を開墾した際にここに廃棄したものとみられる。調査区はこの沢を境に東側は急斜面であるが、西側はゆるやかになって丘陵裾へ続いている。沢跡の調査区外東側には湧水があって、調査区にはここから水を人家へ引くためのパイプが埋設されていた。

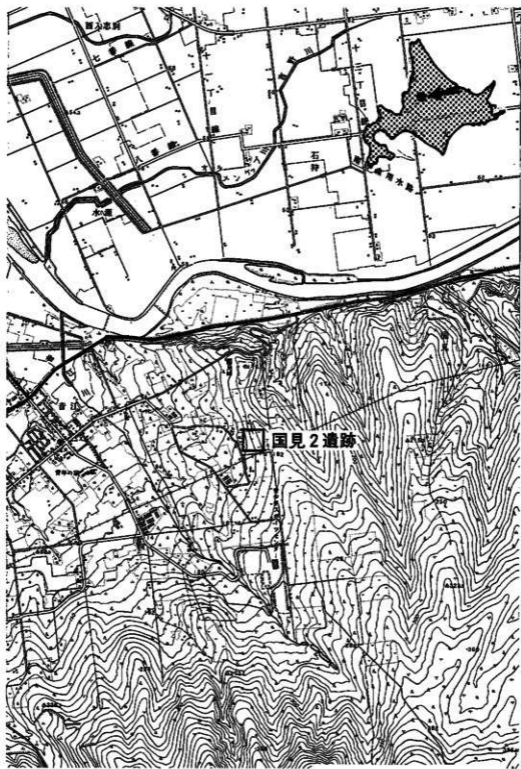


図1-1 遺跡の位置

この図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「石狩深川」を複製したものである。 3

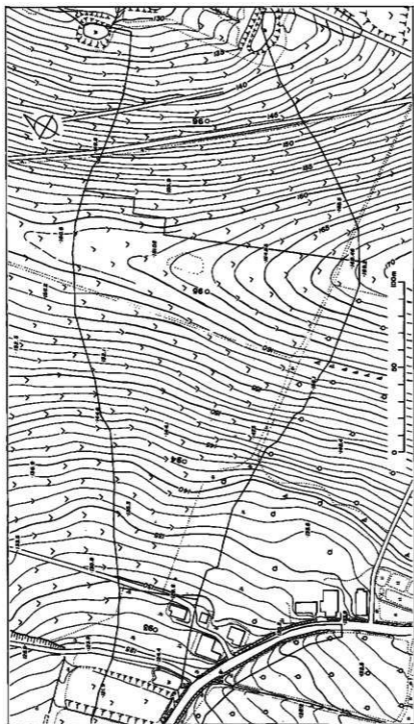


図 1-2 突圍区及び周辺の地形

6. 調査の方法

昭和61・62年度調査で用いた発掘区のラインを延長して、5,000㎡の調査区全域に一辺10mのグリッドを設定、これを基本として発掘を行った。遺物の取り上げなどにあたっては、これを4分割して5mグリッドとし、反時計回りにa・b・c・dと表示した。各グリッドの表示は北西角のグリッドライン交点で表した(例 M-50-a)。

調査を進める過程において、今回の調査区のうち北側では遺物の出土が極端に少ないことが判明したため、全面積の32%にあたる1,600㎡について、耕作土を重機によって除去し、遺構の有無を確認した。

7. 調査結果の要旨

本遺跡は昭和61・62年度に全調査対象面積のうち約80%の発掘を終えており、これについてはすでに報告書を刊行済である。最終年度にあたる今回の調査区の面積は全体の約20%にすぎないが、ここは当初から本遺跡のうちでも比較的保存状態が良好な部分と推定されていた。

遺物の出土分布をみると、調査区中央部にある沢跡より東側の斜面上位に多く、これより西側の斜面下位では遺物包含層が良好に残存している部分があるにもかかわらず、出土点数はきわめて少ない。遺構は堅穴住居跡と土壌がそれぞれ1つずつ発掘されたが、いずれも沢跡東側の斜面に位置している。

堅穴住居跡は径約3mの円形、床上から糸市式土器が出土した。土壌はこれの南約5mの所にある。径約1.1m深さ約0.5m、内部から一個体分の北筒式土器(図Ⅱ-3)破片が出土した。

このほかに出土した土器片は1,100点あまりで、北筒式土器に属するものがこのうちの大半

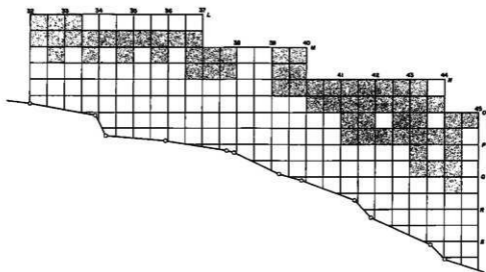


図 I - 3 重機による遺構確認調査範囲

を占めているが、余市式土器も20点あまりある。沢跡の開口部では縄文時代前期のものとみられる押型文土器の破片が2点出土した。

出土した石器類のうちもっとも多いものは片岩の石斧とこれの未成品で、それぞれ100点あまりある。また石斧製作の際に打ち欠かれたとみられる片岩の剝片は4,500以上に及ぶ。これらは耕作によって攪乱された第Ⅱ層から出土したものが大半だが、堅穴住居跡の北約20mの斜面中腹にあった風倒木痕の冪の部分からは、丸のみ形石斧1点と石斧未成品5点が束ねられた状態で検出された。このほかに石鏃・石槍・つまみ付ナイフ・スクレイパーなどの剝片石器も出土している。

これらの石器類はほとんどが北筒式や余市式土器に伴う遺物と推定されるが、沢跡で押型文土器に伴って出土した黒曜石のナイフ1点は縄文時代前期、同じく沢跡の地山直上で出土した赤色蛇紋岩の石斧2点は早期のものと考えられる。

昨年度までの2ヵ年の調査によって、調査区には片岩の石斧やこれの未成品・剝片が多いことから、本遺跡は石斧製作の場としての性格をもつことが想定され、さらにこれらの遺物を残した人間の住居跡が付近に残されていると推定された。今回の調査結果からみると、調査区東半部の斜面から、さらに南へ広がる集落跡が存在することが考えられる。

なお第Ⅱ層中から近・現代に属する陶器片などに混って7発の銃弾が出土した。昨年度までの本遺跡の調査や昭和62年に調査した音江2遺跡から出土したものと同種である。

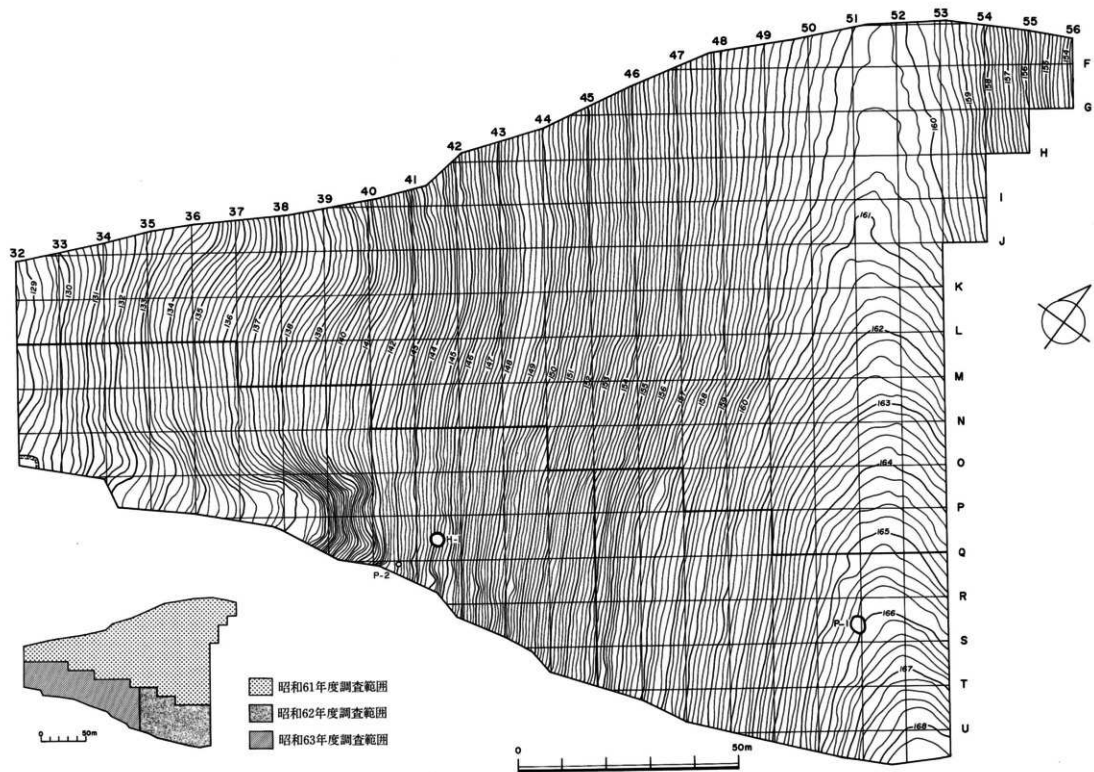


図 I - 4 第IV層上面の地形と遺構位置図

Ⅱ 遺構と遺物

1. 遺構と遺構出土の遺物

今年度の調査で発掘された遺構は沢跡の東側斜面で検出された住居跡1軒と土壌1基である。

(1) 住居跡

H-1 (図Ⅱ-1)

位置 P-41-a・b・c・d

規模 確認面3.12m×2.90m/床面2.50m×2.50m (推定) /最大深0.20m

層位 1:茶褐色土(基本層序の第Ⅲ層に類似) 2:暗褐色土(風化岩片を多量に含有、よく締っている。)

特徴 第Ⅳ層を掘り込んでつくられている。斜面の下側の立ち上がりは耕作による削平のため検出できなかった。平面形は円形とおもわれる。床面は斜面にそって傾斜している。東の壁際に柱穴とおもわれる浅いくぼみが2ヵ所ある。炉跡は検出されなかった。

遺物 覆土2層から黒曜石のフレイクが100点遺構外から流れ込んだ状態で出土した。床面には、図Ⅱ-1・2に示した土器片があった。この住居跡に共存するものとみられる。

土器(図Ⅱ-1-1・2・3、図Ⅱ-2-1) いずれも同一個体の土器片で、全体を復元することはできなかったが、単純な筒形の器形を呈するものと推定される。胎土には砂粒を多量に含有しており、焼成はあまり良くない。器表面に羽状縄文を施した後、幅7mmほどの貼付帯を圍繞させている。縄文はこの貼付帯上にも施されている。

石器(図Ⅱ-2-5・6) 5は使用痕のある剥片。背面の一部と下端部に原石面を残した側面観が湾曲する縦長の剥片を用いている。腹面上端にはバルブが残っており、頂部に小さく残る打面にはわずかに打面調整がみとめられる。背面にも同じ方向から加撃された縦方向の剥離がみられ、下部には下端の平坦な原石面を打面とした逆方向の短い剥離がある。使用痕は両側縁にみられるが、おもに背面に不規則で小さな剥離面が形成されている。

6は石核。剥離が相当に進んだ残核である。一部に原石面を残し、図の上部縁辺に細かい調整を加えて打面とし、小さい打角で剥離している。加撃方向は不規則で、剥離面の観察から想定される剥片も不定形のものである。

(2) 土壌

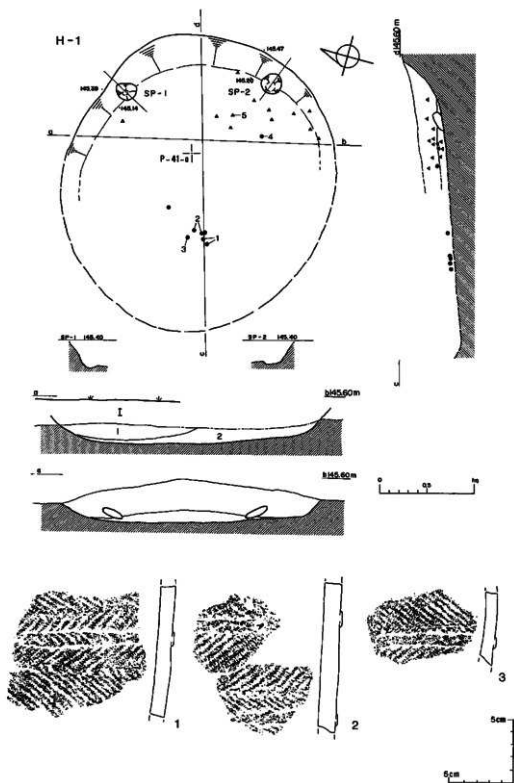
P-2 (図Ⅱ-3)

位置 Q-40-d

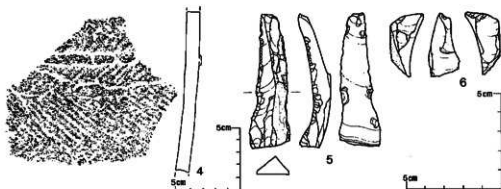
規模 確認面1.12m×1.11m/坡底0.50m×0.42m/最大深0.50m

層位 1:暗褐色(粘性あり)。ブロック状。拳大の礫を含む。埋め戻した土である。)

特徴 第Ⅳ層を掘り込んでつくられている。坡底面は平坦であるが、狭い。壁面はゆるやかな傾斜で立ち上がる。



図Ⅱ-1 H-1と出土遺物

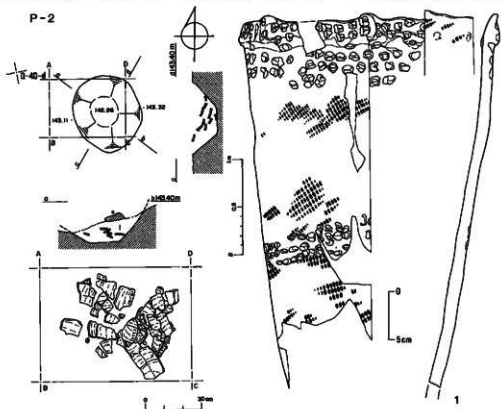


図Ⅱ-2 H-1 出土遺物

遺物 覆土上部から擴底面の直上まで、土器の大破片が不規則に重なった状態で出土した。この土器は底部を欠くが、ほぼ1個体である。(図Ⅱ-3)。この土壌に共伴するものとみられる。ほかに数個の自然礫が出土した。

土器(図Ⅱ-3-1)

筒形の器形を呈する深鉢形の土器である。口径は約27cm。底部を欠いており、器高は現状で40cmである。胎土には径3~10mmの砂礫を含み、器面はざらついている。調整は雑で、器表面



図Ⅱ-3 P-2と出土遺物

には凹凸がある。口縁部はわずかに外反し、口唇上に6個の山形突起があるほかは平坦である。口縁には断面が三角形の肥厚帯があり、この直下には、斜め下から棒状の施文具を突きあげることによって施された円形の刺突列がめぐり、この刺突による突瘤が口縁の内側にわずかにみとめられる。単節斜縄文が口縁を除く全体と口縁の内面に不揃いに施文されている。縄文の施文後、半截竹管様の施文具による刺突列を口縁部の肥厚帯上に2段、肥厚帯下と胴部中に3段めぐらせている。

2. 包含層出土の遺物

(1) 土器 (図Ⅱ-4-5)

土器は図Ⅲ-1に示すとおり発掘区南側の境界に沿って帯状に分布する傾向がある。ただし、大多数は耕作によって攪乱された第Ⅱ層より出土したもので、風化、磨滅のすすんだ破片が多い。器形、文様などの特徴から3類に分けられる。

1類 〔回転押型文が施文されるもの〕 1・2は同一個体で短棒状と格子目状の押型文が施されている。胎土には繊維を含まない。

2類 〔口縁部に円形の刺突文があるもの〕 3~41がこれに相当する。3は指頭による円形刺突文がある。4~20は篋状、棒状等の施文具を用いた刺突文・押引文があるもの、21~29はそれがないものである。4の口縁は扁平で、口唇断面にやや丸みがある。密な刺突列が3段横位にめぐり、地文に縄文はない。本類のなかでは3とともにやや古手のものかも知れない。

5~9には篋状の施文具による2・3段の押引文がある。5は山形突起が口唇上にあるもの。6は形状がやや特異で、口唇直下が薄く仕上げられ、押引文と縄文との文様帯の境に、つまみ上げによる凸帯を付している。同様の凸帯は7・9にもみられる。円形刺突文はこの凸帯より上に施されている。10・11は口唇が外側に傾斜して、断面が切出し状になるものである。12・13は円形刺突文の上下に棒状施文具を斜位に押捺している。14~16は口縁部に近い破片と思われるが、P-2出土土器や昭和62年度調査の包含層出土土器(北埋調報50、図Ⅱ-3-17)のように胴部中に押引文がめぐり、胴部の破片かも知れない。15・16は同一個体である。17~20は爪形文。17・18は同一個体で口唇直下をナデによって薄く仕上げ、その下に隆起帯をつくっている。同様の手法は22にもみられる。

21は口唇を外側から削って切り出し状にしたものである。断面に円形刺突がわずかに残る。23は風化が著しく文様が判別できない。24は器厚が薄く、袖珍土器かも知れない。25は波状口縁の土器。26は磨滅や風化の少ない土器で、斜縄文が密に施されている。口縁部の推定直径が10cmほどの小型土器である。27・28は23と同じく器表面が磨滅しており、文様は不明瞭である。29の内面には整形の際の指あとが残っている。

30~36は胎土や調整痕からみて本類に属すると推定される胴部破片である。30は結束羽状縄文。31~41は本類に属する底部の破片。わずかに外反を示す個体(38~40)と直線状のもの(37)

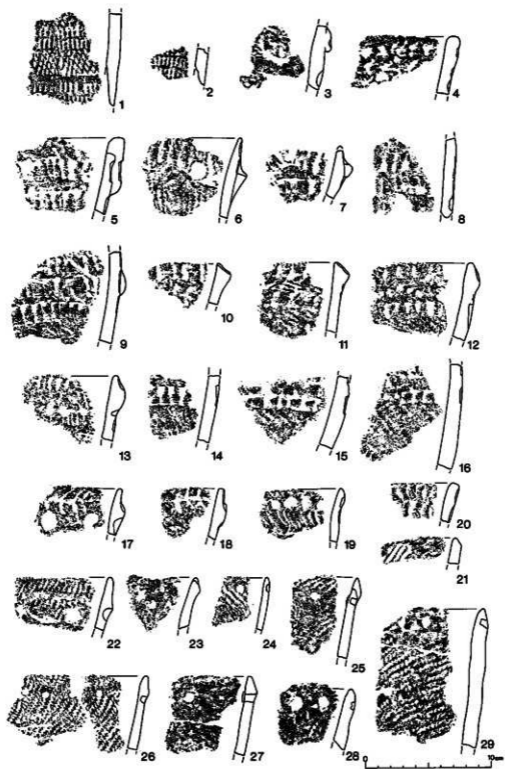
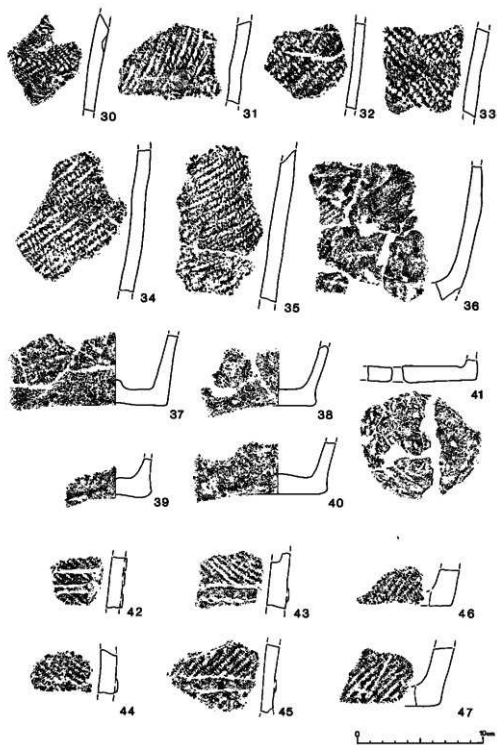


图 II-4 土器 (1)



图五-5 土器(2)

がある。37は底の内側中央部に突起がある。縄文時代中期後葉の土器にしばしば見られるものである。41の底部には貫通孔が1個ある。底面には木葉痕がわずかにみとめられる。

3類 [バンド状の貼付帯があるもの] これらはおもにH-1の周辺から多く出土した。口縁部に相当するものはなく、すべて胴部および底部の破片である。42は無文帯の上に3本の貼付帯を狭い間隔で配している。43・44は縄文を施した後、貼付帯を設けている。46・47は同一個体の底部。

以上、3類について記述したが、その位置付けについて簡単にふれたい。1類の回転押型文が施文されるものは、いわゆる神居式・多寄式などの縄文時代前期から中期に位置づけられる押型文平底土器に相当する。わずか2点であるが、国見2遺跡では今回初めて確認された。2類の口縁部に円形の刺突文があるものは、縄文時代中期の北筒式のなかでもトコロ6類(駒井1964)といわれるもので、国見2遺跡の遺物のうち主体を占める土器である。これは昭和61・62年度調査でも多数出土しており、昨年度の報告ではトコロ6類、トコロ5類に分類しているが、トコロ5類については当地域でのあり方が十分に解明されているとは言い難い現状であり、ここでは単純に文様の一要素から分類することについては慎重を期したい。もちろん、本分類の土器群が将来、細分される可能性のあることを否定するものではない。3類のバンド状の貼付帯があるものは現在、縄文時代後期初頭に編年されている糸市式土器の仲間である。出土点数はあまり多くない。

(2) 石器(図Ⅱ-6-13)

石器の出土分布や出土状況も土器とほぼ同様である。石斧未成品のなかには、耕作機械による損傷を受けたものが少なからずある。

石鏃(1-8) 2と8は無茎。1と8は基部と身部の境界がはっきりしないもの。3・4・5・7は明瞭な基部のあるものである。1は柳葉形で入念な2次調整剝離が全面を覆い左右対称の整った形状を呈する。2は基部が湾入する三角鏃。腹面に1次剝離面を残している。3・4は有茎で、両者とも菱形の似かよった形状である。5は基部を欠損。6-8は1次剝離面を背面・腹面の両方にのこしている石鏃。6は腹面基部にバルブを残しており、側面観は腹面側に湾曲している。調整剝離は背面の側縁に限定される。7は素材の剝片をほぼそのまま用いており、2次調整は基部の両側と身部の腹面右側縁にわずかにみとめられるのみである。8は6と同様、背面の縁辺に調整が施されるもので、腹面左側縁の剝離は一次剝離の際生じたバルブの厚みを取り去るためと考えられる。

石槍またはナイフ(9-29) 9は大型の両面調整体石器で先端は背面からみると主軸よりわずかに右に寄る。調整剝離はやや大ぶりで側縁は鋸歯状を呈し、かつよじれている。基部は身部よりやや厚みをもつ。使用痕とおもわれる微細な刃こぼれが、背面側縁にみとめられる。刃器としての機能をもつ石器であろう。

10-27は「石鈔」と称される中型のポイントである。このうち10-13は身部と基部の境界が明瞭で、基部が舌状になるものである。10は基部下端が折損した後、折断面からさらに調整を

加えている。11～13は身部上半を欠損、破損部位に共通点がみとめられる。

14～23は基部の作出がはっきりしないもので、14～18は背面側に2次調整が集中する傾向がある。14は基部側縁と背面側の身部左側縁に2次調整がみられ、1次剥離面が大きく残っている。15・16は腹面側が平坦で、背面側に厚みがある。17は調整剥離が縁辺にとどまるステップ・フレイキングとなっている。18は横剥ぎの素材を用い、側面視が湾曲している。19・21・22は両側縁が非対称。20は基部に2次調整が集中している。23は柄部の短いナイフである。

24～27は黒曜石以外の原材を用いたものである。24は安山岩。背面側身部の厚みを取り去るため左右から繰り返し剥離を加えているが、短くとどまり成功していない。25～27は片岩製で、石斧製作の際生じた剥片を利用したものであろう。27は未製品で、基部の作出に失敗した例とみられる。28～29は大型の両面調整体石器。製作途中の破損品である。

つまみ付きナイフ (30・31) 素材の剥片の形状を大きく変更せずノッチを入れて柄部をつくり出したもの。いずれも背面の一部に原石面を残している。30は下半部を欠損している。使用によって生じた不規則な剥離が側縁にあるが、2次調整はみられない。31は柄部の厚みを取り去るため腹面に剥離を加えている。背面には刃部形成のための2次調整がみとめられる。

スクイレバー (32～42) 32～36は厚みのある素材の側縁に急斜度の剥離を施したもので、37～42はこれと逆に薄手の剥片を用いて鋭利な刃部を作出したものである。41と42の腹面には長軸と直交する方向に線状痕がある。

石核 (43～63) すべて黒曜石の小型の石核である。44～48は剥片素材で、平坦な狭い打面のあるもの。49～54は側縁部から不規則な剥離を加えたもの。59～63は円礫を素材にしたものである。54と60は同一母岩とみられる。56～58は扁平で、背面の剥離がとらず、ヒンジフラクチュアとなっている。

石斧 (64～93) 緑色あるいは黒色片岩、蛇紋岩、泥岩を用いたもので、敲打や研磨が不徹底なため原石面を多く残した特徴的な石斧である。これの製作に係る未成品、剥片等とともに本遺跡を特色づける遺物である。64・65の2点は沢跡の地山上から出土したもので形態や製作方法が、これらの石斧とは明らかに異質である。この2点は赤色の蛇紋岩製で、同一の原石を用いたものかも知れない。64は側縁を除いて入念な研磨が施されており、直刃の刃部には使用による刃こぼれや線状痕がみとめられない。未使用のものであろう。65は刃部の破片で、背面右側縁に擦切痕がある。93はいわゆる「丸のみ形石斧」である。

図版5に示した石斧と石斧未製品は風倒木痕の肩の部分に束ねられた状態で出土した一括遺物である。風倒木痕との先後関係はよくわからない。94は刃部の湾入がはっきりしないが、形態から「丸のみ形石斧」の範疇に含めた。95～99は石斧未製品。研磨直前の段階である。

すり石 (100・101) 砂岩製のすり石で、自然礫の側縁に使用面がみとめられるものである。

砥石 (102～104) 砂岩製で、いずれも破損している。103は破断面の縁辺にも研磨痕がみとめられ、破損後さらに使用されたことをうかがわせる。あるいは使用上の便宜のため、適当な

大きさに打ち割って使用したものかもしれない。

原石 (105~110) 105・106は黒曜石のいわゆる「棒状原石」。折断面に2次調整が施され、105の側縁には使用痕がみとめられる。107~110は石斧の原材とおもわれる片岩で、110は腹面に原石面を残しており、背面に大ぶりの剝離の加えられている塊状の原石あるいは石核である。

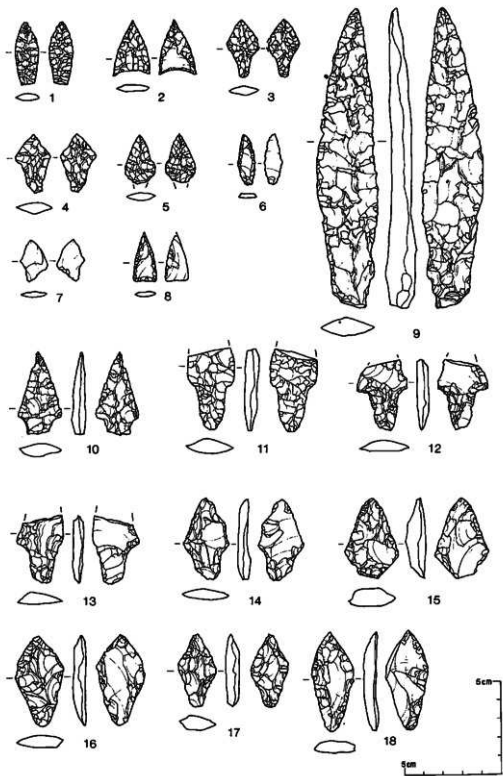


圖 II-6 石器 (1)

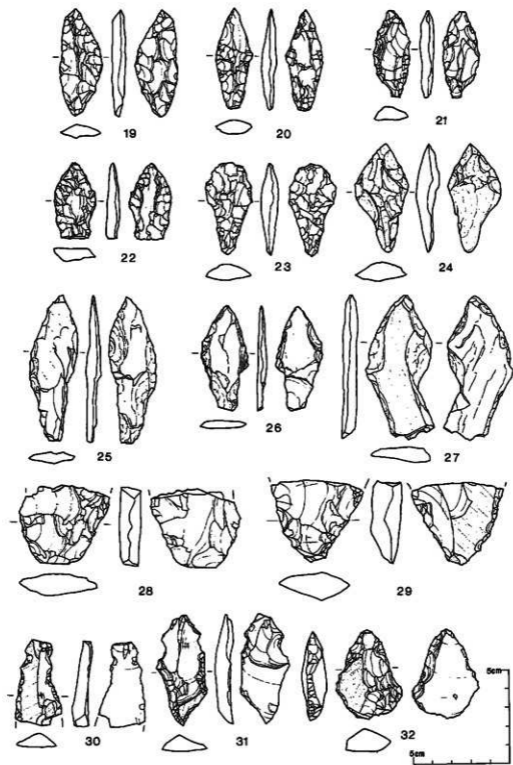


图 I-7 石器 (2)



圖Ⅱ-8 石器(3)

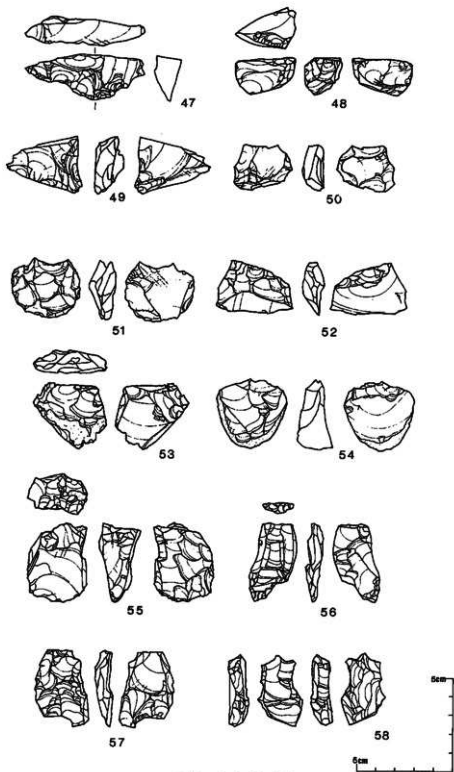


圖 I-9 石器 (4)

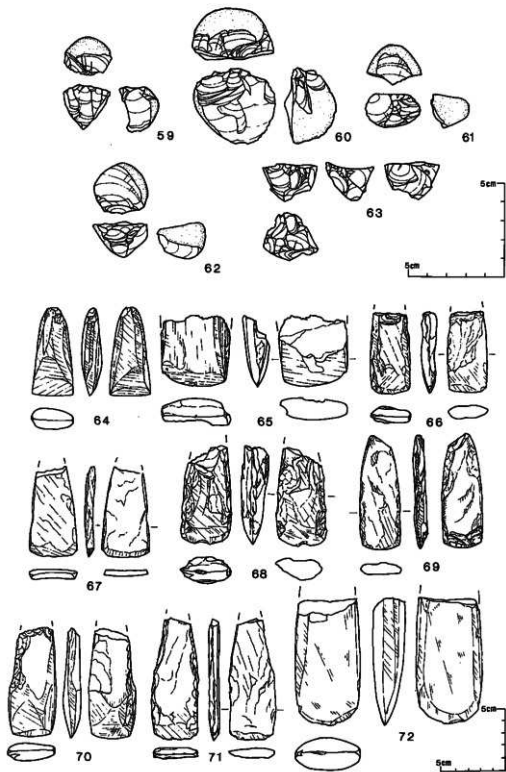


图 I-10 石器 (5)

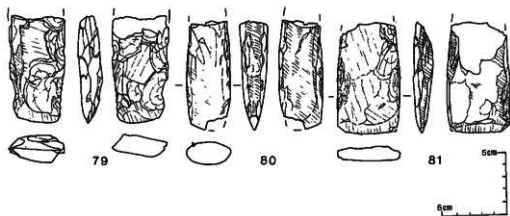
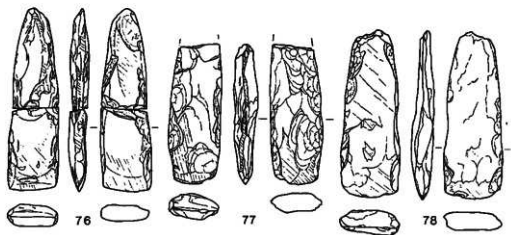
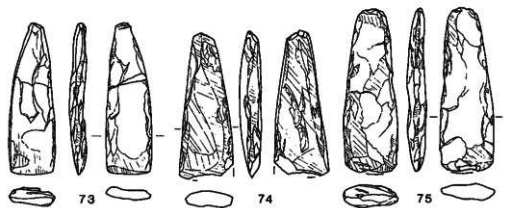
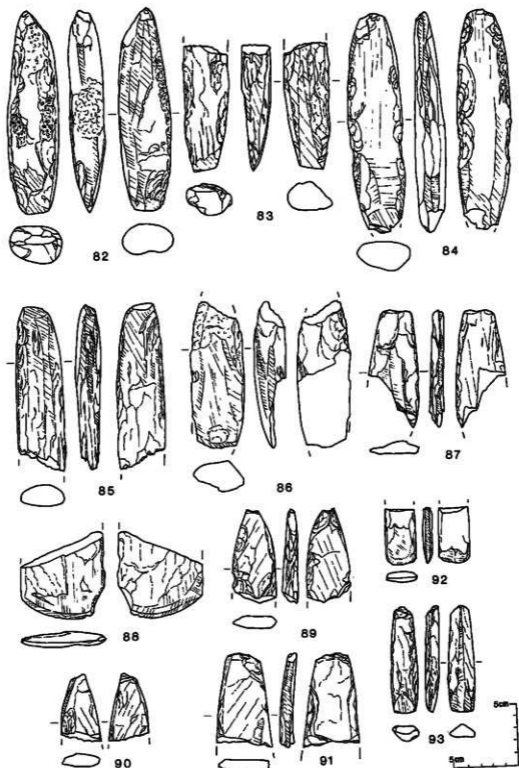


图 II-11 石器 (6)



圖Ⅰ-12 石器(7)

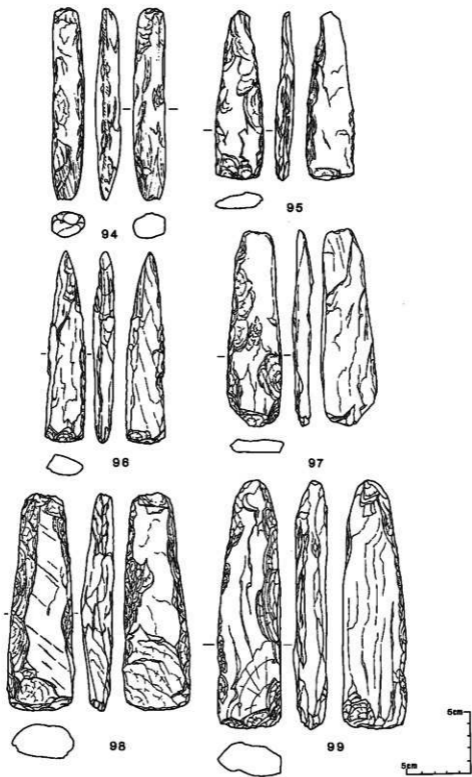
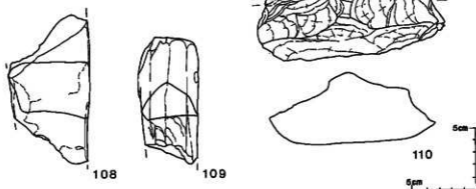
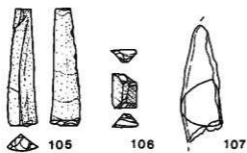
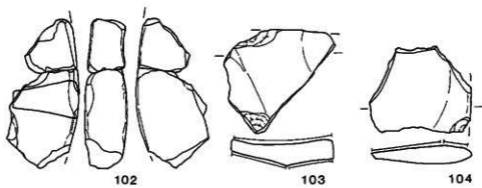
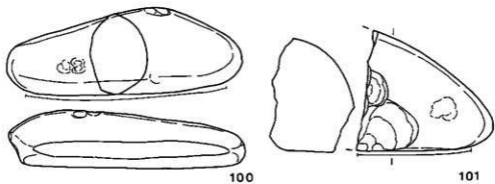


圖 II-13 石器 (8)



圖II-14 石器(9)

表-1 遺構出土遺物一覧表

遺構名	名称	分類	数量	
			覆土	床面
H-1	土器	余市	10	8
		不明	9	
	Uフレイク			1
	石核		1	
	フレイク (Obs.)		100	13
P-2	土器	北筒		113

表-2 包含層出土遺物一覧表

名称	分類	数量	名称	分類	数量
土器	北筒	1,116	すり石		4
	余市	22	砥石		6
	不明	32	Uフレイク		123
	計	1,170	Obs.フレイク		3,952
石鏃		9	Schi.フレイク		855
石槍又はナイフ		29	原石 (Obs.)		2
つまみ付ナイフ		2	原石 (Schi.)		10
スクレイパー		14	礫		41
石核		40	計		5,319
石斧		112	近・現代の遺物		111
石斧未製品		120	総計		6,600

表-3 遺構出土遺物一覧表

番号	遺構	名称	分類	層位	大きさ(cm)	重さ(g)	石材
1	H-1	土器	余市	床			
2	◇	◇	◇	◇			
3	◇	◇	◇	◇			
4	◇	◇	◇	◇			
5	◇	Uフレイク		◇	7.0×2.2×0.4	11.7	Obs.
6	◇	石核		覆土	3.3×1.6×1.5	5.8	◇
1	P-2	土器	北筒	埋土			

表-4 包含層出土掲載土器一覽表

番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区
1	押型文	O-37-a	25	北筒	N-35-c
2	◇	◇	26	◇	O-39-d
3	北筒	O-37-d	27	◇	N-42-c
4	◇	P-38-c	28	◇	N-39-c
5	◇	O-38-a	29	◇	P-38-d
6	◇	P-39-a	30	◇	O-38-c
7	◇	P-38-c	31	◇	O-39-c
8	◇	O-38-b	32	◇	N-35-d
9	◇	O-38-b	33	◇	◇
10	◇	R-44-d	34	◇	O-39-b
11	◇	O-37-c	35	◇	P-39-a
12	◇	O-37-c	36	◇	N-35-d
13	◇	O-36-d	37	◇	M-38-c
14	◇	O-38-d	38	◇	N-35-a
15	◇	N-35-c	39	◇	P-39-a
16	◇	N-38-c	40	◇	P-38-d
17	◇	O-38-c	41	◇	N-35-d
18	◇	O-33-c	42	余市	Q-40-d
19	◇	O-36-d	43	◇	Q-41-d
20	◇	N-40-c	44	◇	◇
21	◇	O-38-c	45	◇	P-40-c
22	◇	O-36-d	46	◇	Q-41-d
23	◇	O-38-b	47	◇	◇
24	◇	O-36-d			

表-5 包含層出土掲載石器一覽表

番号	分類	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	石材	番号	分類	発掘区	大きさ(cm)	重さ(g)	石材
1	石 鏃	P-39-a	3.3×1.3×0.4	1.4	Obs.	14	石 槍又はナイフ	P-39-c	4.8×2.4×0.5	4.6	Obs.
2	◇	P-40-b	2.9×1.7×0.4	1.4	◇	15	◇	P-39-d	4.2×2.8×1.0	8.4	◇
3	◇	O-39-c	3.0×(1.6)×0.5	(1.3)	◇	16	◇	S-44-d	4.8×2.5×0.6	6.6	◇
4	◇	P-41-b	3.0×1.9×0.6	2.2	◇	17	◇	N-42-c	3.9×2.0×0.8	4.7	◇
5	◇	N-39-b	(2.5)×1.6×0.4	(1.2)	◇	18	◇	P-40-c	5.3×2.2×0.7	6.2	◇
6	◇	O-37-b	2.6×0.9×0.3	0.6	◇	19	◇	N-38-d	5.6×2.2×0.7	7.2	◇
7	◇	P-41-d	2.2×1.4×0.3	0.6	◇	20	◇	O-39-c	5.3×1.9×0.7	1.3	◇
8	◇	O-37-c	(2.4)×1.1×0.3	(0.6)	◇	21	◇	O-40-b	4.5×2.0×0.7	5.7	◇
9	石 槍又はナイフ	O-37-a	15.7×3.2×1.0	52.9	◇	22	◇	P-42-b	3.9×2.2×0.7	5.3	◇
10	◇	O-39-a	4.3×2.3×0.7	4.8	◇	23	◇	O-37-b	4.8×2.5×0.9	7.2	◇
11	◇	P-38-a	(4.3)×2.5×0.7	(6.6)	◇	24	◇	P-37-d	5.7×2.8×1.0	11.1	And.
12	◇	P-40-a	(3.7)×2.7×0.6	(4.6)	◇	25	◇	Q-41-a	7.7×2.5×0.7	12.2	Sch.
13	◇	P-40-d	(3.6)×2.4×0.6	(3.9)	◇	26	◇	R-43-c	5.5×2.5×0.5	5.3	◇

番号	分類	発掘区	大きさ(m)	重さ(g)	石材	番号	分類	発掘区	大きさ(m)	重さ(g)	石材
27	石 槌 又は ナイフ	P-39-b	7.6×3.6×0.8	22.7	Schl.	71	石 斧	N-34-a	(9.7)×3.7×0.8	(52.4)	Schl.
28	*	Q-43-c	(4.1)×4.7×1.2	(22.6)	Obs.	72	*	Q-43-b	(10.1)×5.2×2.3	(29.8)	*
29	*	O-39-b	(6.3)×4.8×1.5	(25.1)	*	73	*	P-38-a	11.9×3.6×1.0	67.2	*
30	つまみ付きナイフ	P-41-b	(4.1)×2.5×0.7	(7.0)	*	74	*	P-39-c	(11.5)×4.3×1.3	(26.5)	*
31	*	P-40-b	(5.8)×2.6×0.9	(10.1)	*	75	*	P-39-d	(12.8)×4.3×1.3	(27.8)	*
32	ス タ レ イ バ ー	N-36-c	4.7×3.5×1.2	16.0	Sh.	76	*	Q-41-b	13.4×4.0×1.3	135.4	*
33	*	N-35-b	4.9×3.2×1.2	18.2	Obs.	77	*	P-40-c	(11.0)×4.2×1.9	(26.6)	*
34	*	O-39-c	5.6×3.4×1.3	23.0	*	78	*	O-39-c	13.2×4.7×1.5	136.9	Ser.
35	*	O-42-d	4.8×1.8×1.3	7.2	*	79	*	P-39-c	(8.6)×4.4×1.7	(26.1)	Schl.
36	*	表 探	3.0×3.5×1.0	13.6	*	80	*	Q-40-d	(8.6)×3.5×1.7	(42.7)	*
37	*	R-43-d	4.3×1.8×0.7	5.5	*	81	*	P-42-d	(5.8)×4.9×1.1	(20.3)	Ser.
38	*	O-39-d	3.5×2.6×0.8	9.0	*	82	*	P-39-c	16.1×4.1×2.4	267.7	*
39	*	R-44-c	(2.9)×2.5×0.5	(4.0)	*	83	*	N-40-b	(10.0)×3.5×2.3	(28.2)	*
40	*	表 探	6.8×2.3×0.9	11.7	*	84	*	Q-42-c	(17.4)×4.3×2.2	(26.9)	Schl.
41	*	O-39-b	6.4×3.7×0.8	17.4	*	85	*	L-36-b	0.8×0.8×0.8	(20.3)	*
42	*	R-44-b	6.5×3.9×0.7	14.4	*	86	*	P-40-b	0.9×0.9×0.9	(22.3)	*
43	石 槌	N-40-c	2.1×2.2×0.6	2.8	*	87	*	N-39-b	0.8×0.8×0.8	(44.4)	*
44	*	O-42-a	4.2×2.1×0.8	6.2	*	88	*	Q-41-d	(6.8)×6.7×1.0	(59.2)	*
45	*	O-40-a	2.9×1.8×0.9	3.3	*	89	*	N-39-b	(7.4)×(5.5)×0.9	(40.3)	*
46	*	R-43-a	5.2×1.6×0.9	5.6	*	90	*	N-32-a	(5.3)×3.1×1.0	(27.2)	*
47	*	P-40-b	6.3×2.4×1.4	14.2	*	91	*	P-41-b	(7.5)×4.4×0.8	(51.9)	*
48	*	N-33-b	3.1×1.9×1.9	10.6	*	92	石 の み	N-32-d	(4.5)×2.4×0.8	(15.8)	*
49	*	O-39-a	4.0×3.0×1.5	11.7	*	93	丸 の 形 石 斧	O-38-a	8.6×2.1×1.0	29.8	*
50	*	O-37-b	3.0×2.4×1.1	7.5	*	94	*	N-42-c	15.2×2.5×2.0	117.8	*
51	*	P-38-a	3.6×3.1×1.3	10.9	*	95	石 斧 未 製 品	*	13.3×8.8×1.2	77.0	*
52	*	O-39-a	4.0×2.7×1.2	9.6	*	96	*	*	15.1×9.2×1.6	95.5	*
53	*	N-35-d	3.9×3.4×1.0	11.8	*	97	*	*	15.5×4.4×1.2	124.0	*
54	*	P-40-a	3.7×3.6×1.7	18.9	*	98	*	*	17.2×5.4×2.7	324.5	*
55	*	P-40-c	4.1×3.2×2.1	23.7	*	99	*	*	19.7×5.1×2.7	385.2	*
56	*	Q-41-d	2.5×4.1×0.8	7.1	*	100	す り 石	O-39-a	6.8×18.6×4.4	770.0	Sa.
57	*	O-37-d	4.1×2.9×0.8	9.3	*	101	*	P-39-c	0.8×0.8×0.8	(28.0)	*
58	*	O-40-a	2.3×3.8×0.9	8.5	*	102	原 産 石	Q-41-d	0.8×0.8×0.8	(28.0)	*
59	*	P-38-a	2.5×2.3×2.1	8.8	*	103	*	N-35-c	0.8×0.8×0.8	(25.2)	*
60	*	P-41-b	4.3×4.0×2.7	41.6	*	104	*	O-38-d	6.8×0.8×0.8	(22.5)	*
61	*	P-39-c	2.9×1.8×2.0	9.2	*	105	棒 状 原 石	P-39-c	6.2×1.5×0.9	6.9	Obs.
62	*	M-35-a	2.9×1.8×2.6	11.2	*	106	*	M-35-a	1.8×1.4×0.7	1.8	*
63	*	P-41-c	2.9×2.5×1.3	8.7	*	107	原 産 石	M-32-b	0.8×0.8×0.8	(28.4)	Schl.
64	石 斧	O-37-c	7.0×3.3×1.5	41.4	Ser.	108	*	O-35-d	(12.0)×6.5×4.5	(26.0)	*
65	*	O-39-b	0.6×0.6×0.6	(67.4)	*	109	*	O-39-b	0.8×0.8×0.8	(28.3)	*
66	*	Q-42-c	(6.4)×3.2×1.1	(44.2)	Schl.	110	表 探	0.8×0.8×0.8	(1.200)	*	
67	*	O-39-c	(7.2)×3.8×0.5	(27.9)	*	111	*	P-41-b	(11.2)×6.3×2.8	(26.4)	*
68	*	R-42-a	(7.8)×4.1×1.7	(24.2)	*	112	*	P-39-d	(8.3)×5.8×2.3	(28.5)	*
69	*	P-40-b	9.0×3.1×0.9	43.0	Ser.	113	*	N-39-c	(11.8)×6.0×3.2	(21.7)	*
70	*	N-39-a	(8.8)×3.8×1.4	(74.6)	Schl.	114	山 石 斧 未 製 品	O-35-a	(11.8)×5.8×3.5	(26.1)	*

番号	分類	陸揚区	大径(m)	重量(t)	石材	番号	分類	陸揚区	大径(m)	重量(t)	石材
115	石弁未製品	表採	(8.6)×5.9×3.9	(28.0)	Schi.	119	石弁未製品	P-41-b	(10.3)×3.2×2.5	(18.6)	Schi.
116	*	O-43-d	(10)×5.8×4.0	(31.0)	*	120	*	O-39-a	(10.9)×3.1×1.2	(98.2)	*
117	*	O-37-b	(11.8)×5.5×3.8	(41.5)	*	121	*	P-39-c	(8.8)×3.5×2.4	(97.1)	*
118	*	P-38-d	(11.7)×5.9×3.8	(42.4)	*	122	*	P-40-c	(7.9)×4.6×1.8	(94.7)	*
119	*	S-44-a	(10.8)×6.7×3.3	(29.7)	*	123	*	P-44-c	(9.1)×4.8×2.3	(48.7)	*
120	*	O-42-a	(10.1)×5.6×3.3	(28.5)	*	124	*	O-41-c	(5.7)×3.9×2.1	(74.8)	*
121	*	O-37-d	(8.2)×5.5×4.0	(28.2)	*	125	*	P-43-d	(8.9)×4.2×0.9	(51.8)	*
122	*	R-44-a	(8.9)×3.9×3.0	(30.5)	*	126	*	N-38-b	10.3×5.4×0.9	83.2	*
123	*	Q-42-a	(8.9)×3.4×2.4	(84.1)	*	127	*	表採	(13.5)×4.3×1.9	(82.2)	Ser.
124	*	O-37-b	9.4×3.1×1.3	55.9	*	128	*	O-35-d	(8.8)×3.6×1.2	(72.5)	Schi.
125	*	P-40-a	6.7×2.9×1.0	27.7	*	129	*	R-43-d	(9.6)×3.3×0.8	(48.7)	*
126	*	P-41-c	9.4×3.3×1.3	54.4	*	130	*	O-34-d	9.2×3.0×0.6	(90.5)	*
127	*	表採	11.6×2.5×1.4	57.9	*	131	*	R-44-d	(10.0)×4.1×1.8	(27.5)	Ser.
128	*	O-35-b	9.0×3.0×1.3	51.4	*	132	*	S-44-d	(10.8)×4.9×2.5	(81.4)	Schi.
129	*	O-39-c	(9.7)×3.5×1.4	(69.9)	*	133	*	R-44-a	(7.5)×4.7×1.7	(90.0)	*
130	*	P-38-a	(12.9)×4.5×1.2	(35.0)	*	134	*	N-38-c	(13.7)×5.3×0.6	(126.4)	*
131	*	O-39-c	10.0×4.0×0.6	(82.2)	Ser.	135	*	R-43-d	(9.3)×3.1×2.4	(88.5)	Ser.
132	*	R-44-a	11.5×3.1×1.4	79.2	Schi.	136	*	N-35-c	(9.0)×4.6×1.9	(51.9)	Schi.
133	*	O-40-b	(11.4)×4.1×1.4	(99.7)	*	137	*	R-44-b	(10.7)×4.1×2.1	(32.4)	*
134	*	O-39-d	(10.1)×4.0×1.1	(81.5)	*	138	*	P-39-d	(7.3)×4.5×1.6	(93.2)	*
135	*	O-38-c	11.4×3.5×2.3	161.6	*	139	*	Q-42-c	(9.3)×4.0×2.3	(113.9)	*
136	*	P-39-d	(12.2)×4.4×1.3	(90.4)	*	140	*	P-40-c	(9.6)×4.3×1.6	(85.1)	*
137	*	N-34-d	11.0×4.0×0.7	(84.8)	*	141	*	Q-44-b	(5.8)×5.2×1.4	(78.7)	*
138	*	N-39-b	12.6×4.0×2.2	165.6	*	142	*	N-36-b	(10.0)×4.3×1.8	(112.7)	*
139	*	9-12-d	25.6×5.7×2.3	497.2	*	143	*	O-35-d	(8.8)×3.4×1.0	(43.8)	*
140	*	Q-42-e	22.5×5.0×3.0	415.7	*	144	*	O-37-c	(8.3)×3.9×1.1	(56.0)	*
141	*	P-40-c	15.4×3.4×1.9	141.9	*	145	*	O-37-d	10.0×3.0×0.7	(57.8)	*
142	*	P-38-c	14.7×4.2×1.3	169.2	*	146	*	P-40-a	11.0×3.3×1.9	87.4	*
143	*	P-41-b	13.4×5.2×1.9	219.8	*	147	扉	P-44-c	(11.3)×2.6×1.8	(87.6)	*
144	*	P-38-a	14.0×4.2×0.6	(117.4)	*	148	石弁未製品	P-41-c	(8.7)×2.4×1.4	(38.3)	*
145	*	N-34-d	10.8×4.6×1.1	168.3	*	149	*	O-40-b	(8.2)×4.2×2.3	(124.6)	*
146	*	M-32-c	(11.5)×4.1×0.9	(66.3)	*	150	*	Q-43-c	(9.7)×3.8×1.5	(94.8)	*
147	*	O-35-d	(11.7)×4.8×2.1	(117.4)	*	151	*	Q-42-b	(9.1)×3.9×1.8	(96.4)	*
148	*	Q-43-c	(9.7)×3.5×2.5	(126.6)	*	152	*	P-41-b	(9.7)×4.7×2.0	(113.3)	*
149	*	P-40-b	(10.2)×4.7×2.8	(131.4)	Ser.	153	*	O-38-c	9.0×4.5×0.6	(94.7)	*
150	*	P-40-d	10.9×4.0×0.6	(116.6)	Schi.	154	*	表採	9.0×3.8×0.6	(70.1)	*
151	*	P-40-c	12.0×7.2×1.7	(118.8)	*						
152	*	P-40-a	(8.2)×4.8×2.1	(112.2)	*						
153	*	Q-40-d	(7.8)×3.8×3.6	(111.2)	*						
154	*	Q-42-b	(9.4)×4.7×2.5	(112.0)	*						
155	*	表採	(11.1)×5.4×3.5	(109.3)	*						
156	*	O-37-b	(8.5)×3.6×1.2	(54.5)	*						
157	*	P-38-d	11.1×4.4×1.5	99.6	*						
158	*	Q-41-d	(11.5)×5.4×2.0	(111.1)	*						

Ⅲ まとめ

本年度の調査区は昭和61・62年度の調査区に隣接しており、ひとつながりの遺跡として把握できる。この遺跡はⅡ章でも述べたように、おもに縄文時代中期、後期にわたって営まれたことが推定されるが、耕作による攪乱のため良好な包含層が残存していないことから、遺物の層位的・平面的な出土のありかたが本来内包する遺跡の情報量が大きく制約されている。

土器群について 神居式・多寄式などといわれる押型文平底土器については、近年、発掘調査による資料が徐々に蓄積され、これを整理した大沼忠春氏の論考（大沼1986）によって編年の大綱に指針が得られたようである。今回、国見2遺跡から出土した押型文土器は氏のいう「第2類」に相当しようか。北筒式・余市式土器は昭和61・62年度の調査においても相当量出土しており、この遺跡を代表する土器といえる。これらの北筒式土器は口縁部に狭い肥厚帯のある「トコロ6類」で、なかでもP-2より出土した完形土器は音江2遺跡H-3出土の土器（北埋調報49）とあわせて、この地域における標準的な資料となろう。

余市式土器はここ数年、当センターの行った空知地方の調査において、つねに北筒式土器と共に出土している土器である。今回の調査でも両型式の土器は分布を同じくして出土した。

H-1はこの余市式土器の住居跡と考えられ、一個体の土器片が床面に散乱した状態で出土したが、北筒式の土器片は全く混じっていない。北筒式と余市式土器がともに出土する石狩低地帯の諸遺跡でも同一遺構内における両者の確実な共存例が報告されていないことから、分布を同じくするけれども北筒式と余市式土器は別系統のものとして理解するのが妥当とおもわれる。

石器について Ⅱ章でふれたとおり、片岩・蛇紋岩製の石斧、およびこれの未成品が出土量としてはもっとも多い。しかし、石斧製作に必要なと考えられるたき石、砥石の絶対量が過年度調査分を合わせてもあまりにも少ない。石斧の調整剝離痕の観察では、硬質のハンマーによる直接打撃によるものと想定され、木や骨等が用いられたとは考えにくい。国見2遺跡に隣接する音江2遺跡でもこれと同様の状況であり、このような製作用具はその場に放置することなく、いづこかへ搬出されたのであろうか。あるいは、空知太2遺跡で検出された「集石をとまなう土壌」（北埋調報41）のように一定の場所に集中して廃棄あるいは貯蔵されるのかもしれない。

この遺跡で生産された石斧・石斧未成品は、ここですべてが直ちに使用されたとは考えにくく、常識的にみて相当数が他地域に供給されたと推定できよう。N-42-cで一括出土した丸のみ形石斧1点と研磨直前の石斧未成品5点のあり方からみると、石斧は一回にこの位の単位で製作され、搬出されていった可能性も考えられよう。さらにいえば、丸のみ形石斧は石斧未

と遺構は少なく、位置も調査区南部に片寄っている。耕作による削平のため隠滅した可能性も否定できないが、遺物の分布状態や住居跡が調査区の南側境界寄りにあることから考えると、調査区域外の尾根上から斜面中腹にかけて集落が存在する可能性がある。また沢跡より西の丘陵裾部には、包含層が良好に残存している所があるにもかかわらず、出土遺物が非常に少ない。ここからは縄文時代早期や前期のものとみられる遺物がわずかに出土したことから推定すると、調査区外の丘陵裾部にはこれらの時期の遺構が存在することも考えられる。

引用参考文献

- 駒井和愛編 (1964) 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡 (上)』東京大学文学部
瀬川秀良 (1974) 『日本地形誌 北海道地方』朝倉書店
—— (1977) 『深川市史』深川市市役所
大沼忠春 (1986) 『北海道の押型文土器』『考古学ジャーナル』No.267
—— (1986) 『砂川市 空知太2遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター
—— (1987) 『深川市 園見2遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター
—— (1987) 『深川市 音江2遺跡』(財)北海道埋蔵文化財センター
—— (1988) 『日進33遺跡』名寄市教育委員会

写 真 图 版



遺跡遠景 (沖里河山頂より)



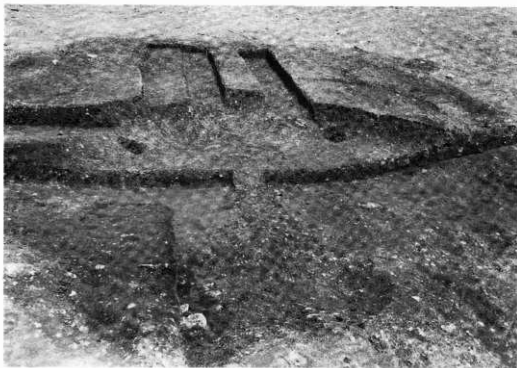
発掘調査前の状況



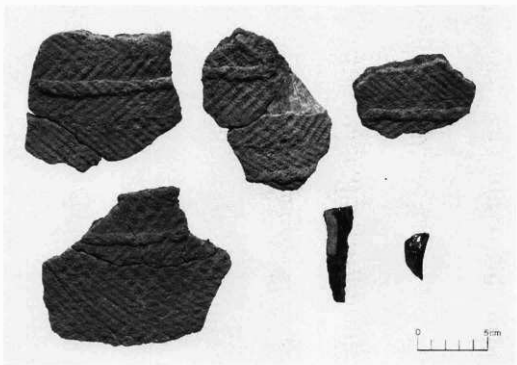
発掘調査後の状況（40～45ライン）



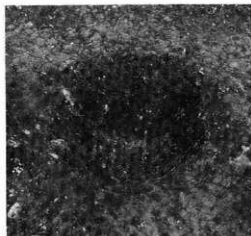
発掘調査後の状況（32～40ライン）



H-1



H-1 出土の遺物



P-2



P-2 遺物出土状況(上面)



P-2 出土の遺物



P-2 遺物出土状況(中位)



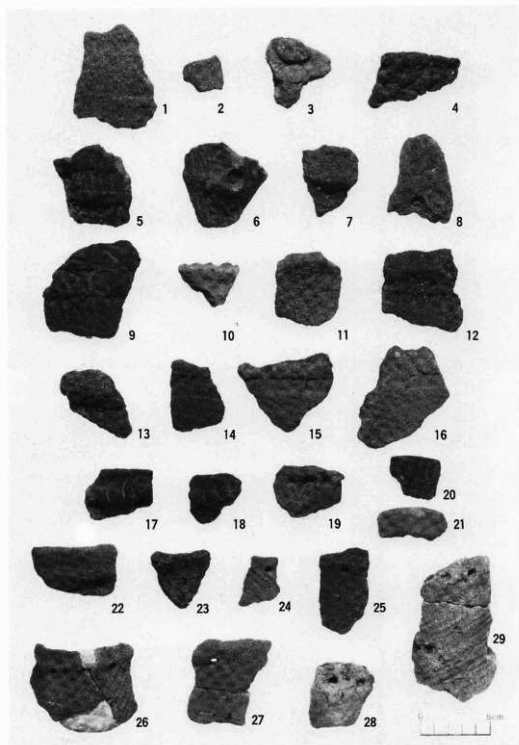
P-2 遺物出土状況(下面)



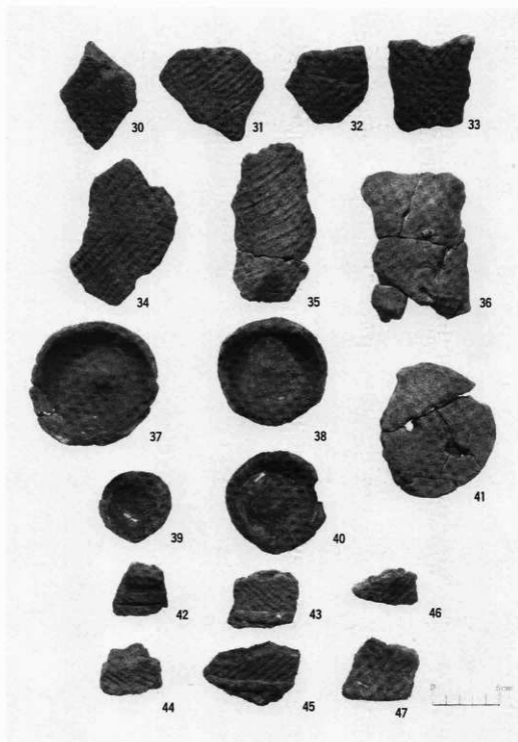
調査の状況



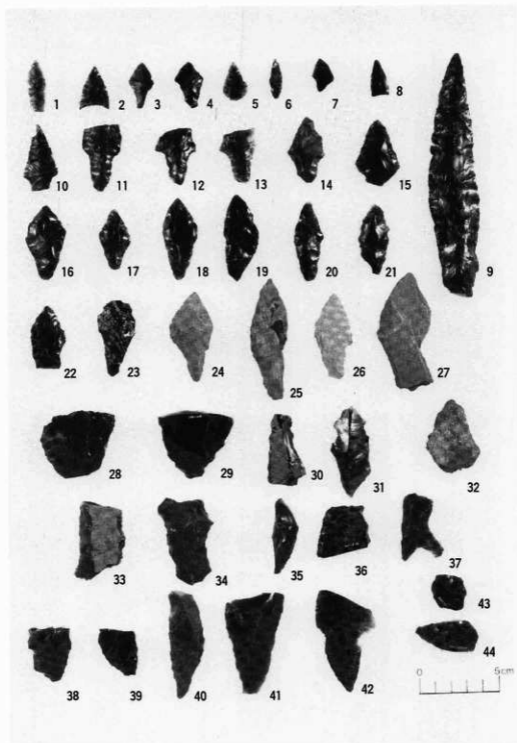
石器(5)の出土状況



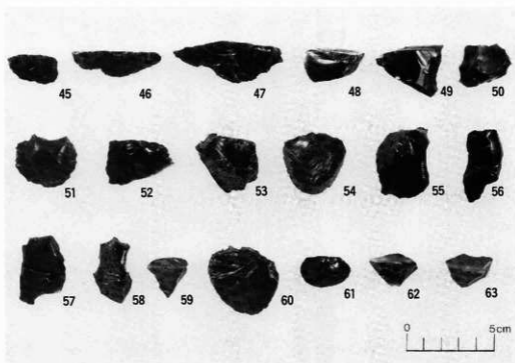
土器 (1)



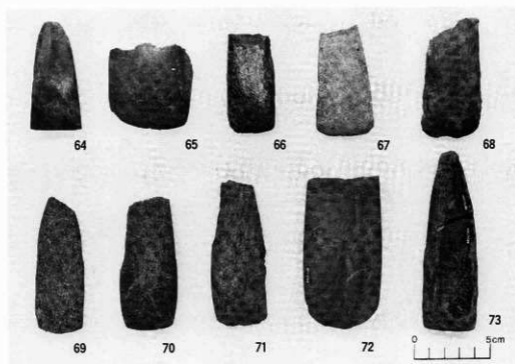
土器 (2)



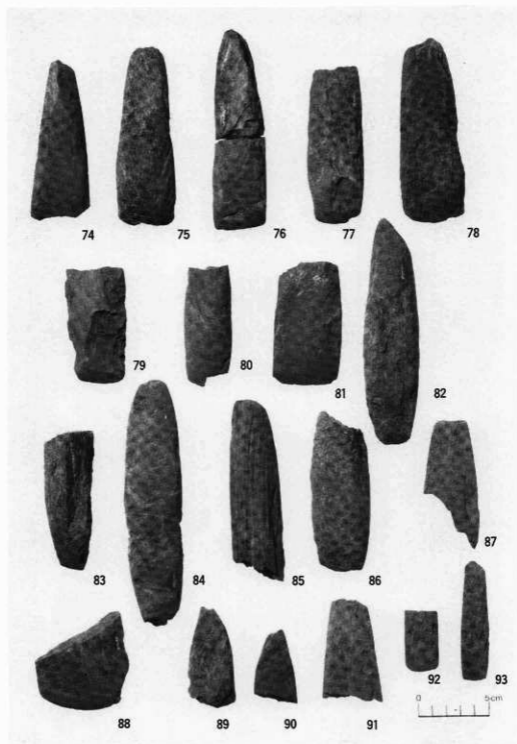
石器 (1)



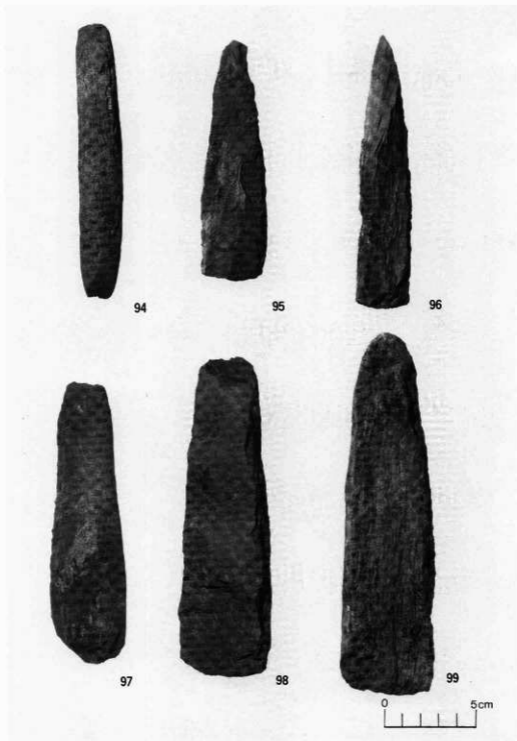
石器 (2)



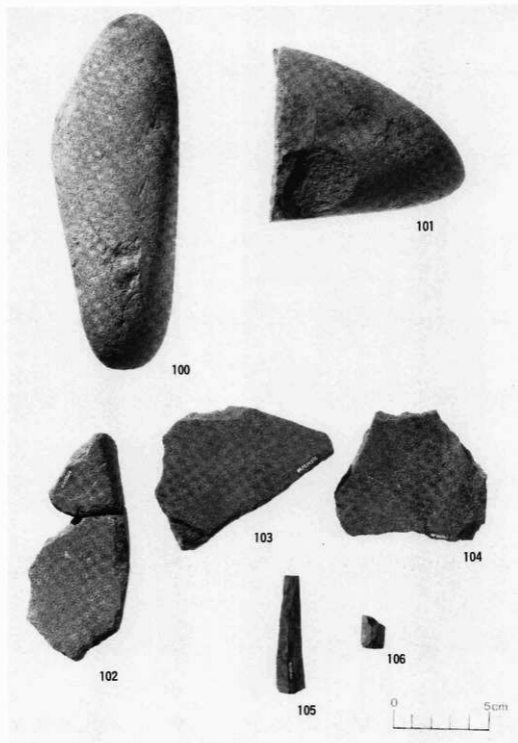
石器 (3)



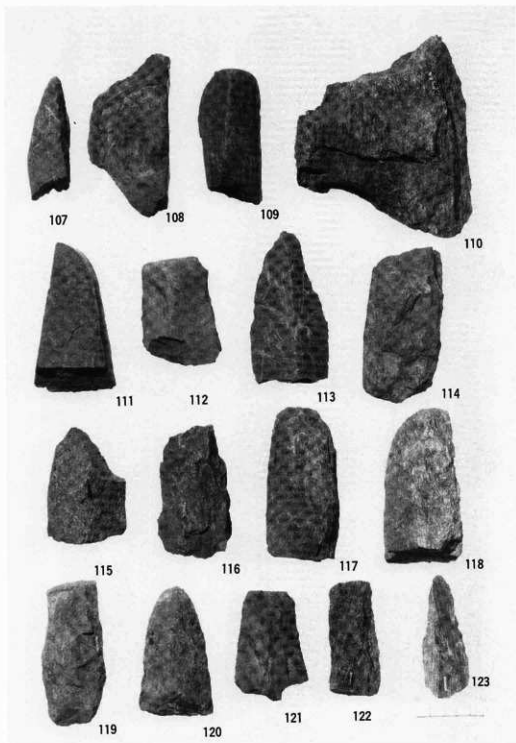
石器 (4)



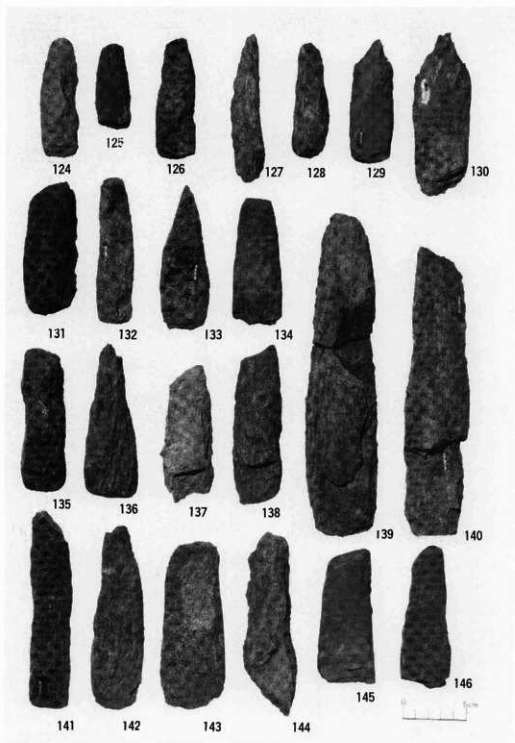
石器 (5)



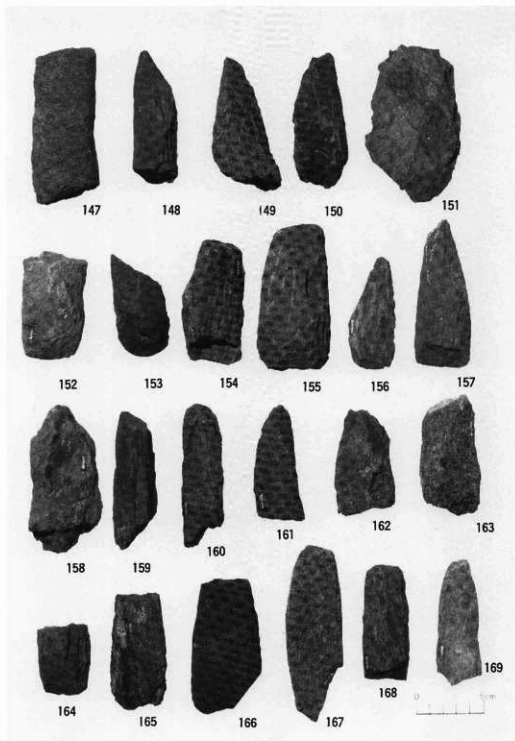
石器 (6)



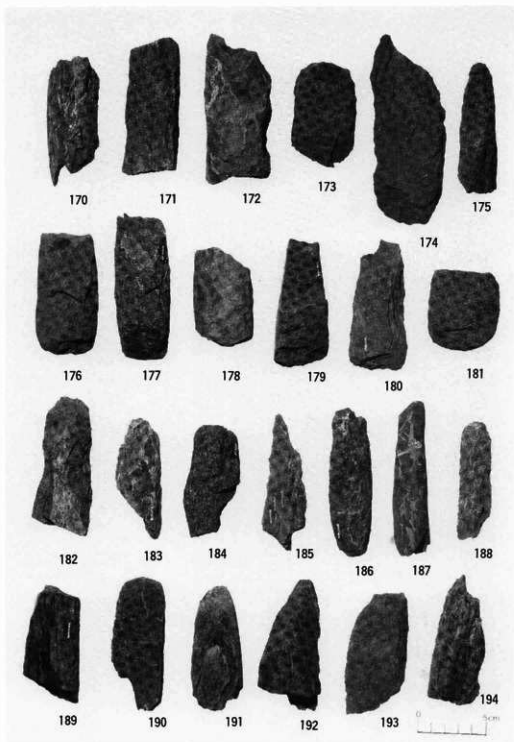
石器 (7)



石器 (8)



石器 (9)



石器 (10)

財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第56集

深川市 国見2遺跡(Ⅱ)

—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成元年3月31日発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

TEL (011) 561-3131

印刷 中西印刷株式会社

〒065 札幌市東区東雁来3条1丁目

TEL (011) 781-7501
